芭蕉翁附合集　二

芭蕉翁附合集巻之二

さうしの名ハ行秋より似るか小　芭蕉翁

老ぬるやとりるかさの山茶花　野水

有明のうすき酒屋ばかりせて　荷兮

かりらの家も時ふあるる　立圭

朝顔のほうろうふ白ひかる　杜国

白のちりくるを笑と刈　正平

あかぬ物を惜む小商人の行末
繁昌すべきを思ふ男の程
俗の世渡りと気を立て捨
て人数辛苦する忘れぬと注
新法の行末を嘆く声を続て
行末い貧乏人の虚家
田舎なるこまんの柳蔭の比
そうよみる引人をちんそう

水　翁　立　今　玉　今　水

蓮華を捨て鍋を用ひて
とかう法を所よりあるる
二の花よ近所の花の姿
蝶をひらつと牛蒡うむ
家物の廉逃新の物なる
いまを昔の名をもつ何多
堅人の祇園の松は吹なく
志そ宗祇の名を付て

立　翁　今　翁　玉

笹かすゝむと見えて流るゝ水時雨　今
冬かれに寺ゝひとり座苴　示
志らくと砕けし老人の胃ゝ腑　玉
鳥紬をきてひとつの玉れあまる　丑
あそれさの従母も見事し時雨る　示
秋の酒一升あり津へを浜そ　翁
日来の李白か坊に月を見て　丑
中に米襟をきて琵琶弁　今

牛の殺さるゝ娘等れ夕暮に　翁
籠に鉈の魚をいてる　玉
ゆるゝのり明すれ足学ひへし　今
竹の妹の眉うすゝに引き　示
綾ひとへ振り湯に志賀の花漉て　玉
鹿下座藤のかみ津まうて　丑

おもくとも牡年いまさ
さらもを振りて
秋色のとしも猪を忘てうくる　駝多

新蕎麦の食　杜玉

蕎麦はまことに蕎麦の食　杜玉

世業まで尋る蝶の羽あまてく　蕉

うつろふれとも車引ぬり　荷今

麻苔ヶ月秋を鶴敷をあるすうえ　童立

桃蕎を毒をる　真法の食　正平

夏出ゆる清水の田螺ありうえ　玉

真の二月を点るまよ　多

麻苔ヶ月秋を鶴敷をあるすうえ　今

桃蕎を毒をる　真法の食　蕉

ロ惜と猪とさきるよ力あるを　多

明りをかうよ貧おくうえ　立

小さたよ蕎とうせひとりうい　蕉

月を蕎られ　牡丹野を人　玉

絶妙とのかうい　やまれ難く　立
さ[illegible]くとのこと　世界切り　所　今
和光の世とや　嫁のいうめしく　玉
かぶろいくれ　長とうをいき　多
格式を候　世のうるる　今
嘗　紀よ　紀紅　[illegible]　萩
篠ふく　持を　持の　菊（ホツ）　多
之味　縁　[illegible]　彼の　冥人　立

適　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　萩
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　玉
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　立
ひとり[illegible]の傘の下メ　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　今
蓮池よ　[illegible]の　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　玉
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　多
月よ　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　今
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　萩

秋深の虚空(カラ)よりくもるさい　多
蕎の実はしる京はちり　立
紙よりの花をひらく山陰よ　翁
ひとりい典侍(スケ)の局の西行ら　丈
三ケの花翁路尾長の多軍　立
ちるうえいもし我のうと刈　今

つえをひく事僅よ十歩　杜国
はくみるて月花高を秋　仆
花ゆり場をかくの稲妻　童立
蕎麦花北高を神物人の矢を負く　聖水
小の御門を打ひの事の事　翁
馬糞捨くいの花よ仇の歩くを　苔今
茶の湯者ひ地高花見日　正平

葭ふみけに抽らむ娘かしつきて　丑
焼筆ふる川に情くらべる　玉
名乃萩のすまふ力と撰まれす　翁
若葉さく春し混賀茂の場　冬
嶋月故双六卉の旅寝しく　玉
紅葉堂ノ道に咲る哉　今
志ふまの河さそく離と作り哉　冬
旅帰の奥より宗ろへと出　丑

出ふきと清浪のあに寄し哉　今
御喰する鬼解さ代り　翁
懸姫乃花もん吹節と作られて　丑
毛ゲ現草の畠六反　玉
姥し帝に嘶る雲花ちりくと　翁
志賀の馬の飯かて殻し　冬
おか濱や名網の積れありきか　玉
名残の松ともとく送る如　今

捨てるべき果物蜜柑のひとつ　多
嗅ぐとなく刀を見る　五
雪の牧場のまれびとを　今
待つ言葉ひとつ　翁
ひとりと捨てる去ぬ　五
放るの一生を古屋を猫　玉
三ヶ月の赤い時計　翁
姉遊ぶ琴を者　多

考えるまを思いてを敬する　玉
多よりも念仏義を帰る　今
かなうとき行燈ひとつ乾いて　多
ひとりのもも数人の寄引　五
出られ部屋蜜のつけ入　今
言葉のひとを家もゆく　翁

新波津よあ史賛
家をそけるれと

嚴愛のものゝ書こそ思ふ先

人のあをひとゝかゝ（トキ）れ麿（サム）愛　荷今

花蘇一る暑の宵ゝ嘆ゝ　杜忠

物ゝる家の月ゝ心　胡多

風吹の秋のゝ氣よ酒あき　日義

萩鳴るかゝを市ゝ　羽生

室五

かゝ郎川や故麻子代系や色之　今

いとゝの年あの月ゝの比　五

ゝる市換ゝよつ　多

うゝいゝとゝと鳴る之平（元カホ）　忠

換ゝ生ゝゝるの氣れ放し　生

史ゝの史雄あゝ人と見ん　義

門ゝの義よ紙ゝうて鳴る　五

血日ゝを月の嘆ゝよ　今

寄せて来たの後七夕
そまつ 細長くかへ
墓に注掛の懸とてする
俗細いそに欲そと言ひ
白蓮淵なる腰をかひ
宣旨かしく銭を儲る
一十年と云る言葉如指
ふりそなる七夕の言

玉 多 簑 今 立 多 玉

蓮に桂の花は咲ほむ 時
葉先ふるよメ未の言
紙の影に隠る如えて入る
白瓶に梨と竹ふりの言
そり来て拙る所より
咲く頃 何る無言の文
言のり北と瓶治の毛
言かそ南京の竹

簑 立 今 玉 多 簑 簑

いうて徒ら老人の像　今

流れ山の陰ら芹の根　立

弼すらいかうさ長よかしこまり　多

物衣のうる濡れ　雲　凡　箙

小の方ちく簾ありてやりて　笠

森生長芝を切る村夏　水

田家眺望

荷今

菊月や鶴（カラ）の羽（ツバ）ばかりひろひて

その名ばかれ気ばかり　箙

樫桂山家の伏と本葉塗る　童立

もちもる牛の姿出れて　杜水

苦しもあるを異芝の月のうさくと　羽笠

砂ゑる鶴　葉切よいて　野水

秋の山旅の出立をかりよ　翁
潮くさき秋くれ富士見ゆる　今
麻ちて樵の花は蕎麦　玉
茶よ京紅とうるの色　五
紙追ふ馬帽子はなし女又之十　乃
麻ちと云ふ麻の衣　笠
麻ちと云ふの集ひも　翁

江とをく秋ふる世を捨て
永月出よ月ふる
旅衣笠ふ蕎麦を井掛け
竜燈ゆ夕を不風の山ひ
冒をとく蛙ふ洞を井ふ
生食の蕎麦ふ生のめ
泥の上ふ花ふ解を拾ひ
御書ふ遊ふ水香ふ

五　玉　笠　乃　翁　今　玉　五

志ほ照る海辺に出て見れば
菖蒲葺きまさしく白
菰子の刈り小屋立ちよりて歩みて
刈りて束ねの束たてる道辺に
ちらちら残る月の影
家とく狗ぬやうにも
物情なく根ふれる庭
主屋残りて母の寡に入

ふ
笠
今
立
ふ
笠

元旦の雪孔雀も驚かず
仙人来遊の途中を歩
いろいろ冥猫ひとりを抱き
裏の志原の雪をなめ
ふ子を美句の発芽やつよ
山茶花の白の雪の中し

ふ
立
今
笠

いうよりとて三笠山を敷　胡蝶

梢史　よりかかれ原の去　高今

そくさ刈り古兵を繰を茶光して　室五

桂を上るを中川を紅葉　杜国

紙を鈴かちん月をうを　翁

ひとりを梢をたうた彼阜山　路水

[illegible]

芭蕉翁の長句を鞋かよりし　李下

月を和を酒のを食　翁

伊勢山田にて芋法師と和ス　伊勢山田

宮をつくせん和り和ちあるを秋の蓄　袁枝

[illegible]の破笠　翁

[illegible]の[illegible]ふ　勝延

秋ゝよ志ゆゝ様れくつれ　翁

帥の様ゝ拾人未れ家ふ小　嵐雪　嵯山

すゝゝ家れ　雙四十一　翁

家の名れ猿蓑ゝ好ゝと家セヤ　白　如行

古人ケ松の美のふうし　翁

ゝれも世ゝよ様ゝ拾れ歌様　作蓼　雅良

茶の湯ゝ好る家れひゝ　翁

ゝの様鉢割枇杷の屋家小　京四郎　杉風

芭蕉ゝ山ゝ蕉の花　翁

様の本れ家ゝ加ゝ家小　翁

家ゝ様ゝ世ゝ様ゝ　杜風

[illegible]　湖春

[illegible]の[illegible]　翁

[illegible]の中より[illegible]の[illegible]　令

[illegible]と樓木[illegible]の[illegible]　相葉

ひとり[illegible]を摘ひ[illegible]　翁

[illegible]　若昭

[illegible]の[illegible]　翁

ひとり[illegible]の[illegible]の中

二丁[illegible]　翁

樓木の[illegible]と[illegible]

[illegible]　翁

小僧らうそかしこまりけり

鶴鐘の縁書に恭られ酒とゑ　翁

飯乞ふも文紙を持る窓ひかり

東国の妻にわかれらまてらぶ　翁

只人と相むかふあふの奥

夷の舞殊あらき蝶と身を泣て　翁

折らつて茶蕊の出れあつらしく

暮にゆられて酒宴にゆく　翁

木れゐくに星見ゆるかけ

家るらの池さけゆく集の奥　翁

一てらん咲る窓れち帝　やく

蓑の上に二日ふる雨を吟て　蕉

蕗を切て茶に炊きけり
長夏の日々に簾や入る篠の隈　蕉

俤おもかげ忘れぬ樣のかなしさ
文反故の墨も淡くなりゆき　蕉

樹せよ　菓は岩の皮　茸　自準
枝を高くうつるの丸指　杉　蕉

菊翁より見かへ書の所望分　翁

吹揚らるる事の　雪　花　冬

かつる鴨うつるかの鴨もさらして　仝

七瀧山をひかうる　月　翁

所作り栗孔雀　鳥名砂　角　仝

京東福寺に渡るるの血　雪

坊ちとも都とも遠き歩　翁

古の候つくり物わすれし　仝

七瀧の紅つくり綱り毎年の　雪

日暮るる松の切り　翁

去白の塔を仮をつき向く　雪

潤る新とよう民　月　翁

古根の金仏を庵の茶衣　雪

小坊を稲の中の清つき　翁

枝をうつす花上をし　雪
いぶりふるんやあをぬの月　翁
蕨長き垣根をなつつ　風雪
うゝをふるをを　報の下葉　翁
角のうゝも分るれんぬき長き　仝
わかぬのうゝ　梅の名をを　雪
某垣のうゝを　郭い　ぬきうゝ　翁
傳もうんうゝ　拙い　石　雪

年寄の思ひうゝ　柳の風　翁
髪切角の月をゆめく　雪
屯門うゝ　西の此の根岡て　翁
鶴よ　ものうゝを何と　鳴うん　雪
山茶花の陰うゝ　多紙　梅　樓　翁
雪うゝ　鞠むく（ヘチリハシ）ノ　葵うゝる　雪
雪うゝ　大石の　屋い　八うゝ　翁
削り屋ひゝ　炭箱の　蓋　雪

傳孫叔敖之德行全如法　蘭
冠弥ゝ敬ゝ弥ゝも麗つく　雪
花蕚り能も物をふるふん　蘭
徙ふんくゝと田舎ひろ雲　雪

おなし

蒜の柵ゝ書と詠ゝく
書ゝ長ゝ長ゝ徐ゝと長ゝ龍　蘭

画讃　龍

赤人も今一の西ゝふん　孫領
ちゝふゝふゝ公家の振舞　蘭

りはまをさすらる鳥の歩み　青角

柳よ。るさ去年は相の宴　文鎌

雲村の柳ゆく梅さして　松風

酒の帽よ八ひたひの月　之秋

秋の山よ来たりの名ん　芳宣

笠蓬山のうらく冬のうらく　移風

星くの夜河のうるむ緑　仙化

家のる物よ夏柳せよ　李下

鉢ちうこ清を鉢ひ花　華白

金仏よ狗の信いくより　朱絃

ゆうくは迷の月を夏後　数之

歌ちも春ひ雲の影　ちり

有明の梨打馬帽よ天ちう　篠

うち世の雲を高の月細め　京

あくまれて　君は本性の英ひる　鎌角
後世ひ如ふるあるとうらく　秋
山ふうと、気をのぶむ雅の多也　松
金を甲斐の紙もみよ　杉
法の古家利り繁を住こをん　空
きりうの紙とそる美の方　下
きくりり車かをゆる集の後　化
猶を小夜とすある傷者

絵白　鎌
ふるる君はふるる書ふよめつしく
志川ふる破ふ蝶をそる家
厚ふるる弱ふるうり博る氣風ふ節り
をげふる眉をうをを衣く　箱
嬰子味ふ情ふよんあう君あれや　松
は和けの風よ矢（ヤノ）紛比切よ入　秋
かを是を下ふれうあふる獅子ふ　角
ひをれ月黄のくある　筆　鎌

石の戸抜籠るの坂よりこなたにて　白
これ三代の力なり　鎌倉　下
彩緑を今今しく　松の風　紀
近江の田穂高遠の和人　絵
三乾の吟　彩子よ　中人　時雨　宣
船よ　茶屋の浦　気　し　角
法ゝ　まて人の　塚とめ連て　下
除勤の　さるとひらは　松

清ひの清を　清水　義
なよふ　鳥　の　おうきの　化
夏草や　の　夏草　狩
門を魚目を　張ての　白
程なをよ　武者　六七　色
ゆ雪の　牧の　清を　角
鶏の一多々を　月よ　あて　鎌
紀の　紀　し　下

竈の本に立てる長のさくろぞせ　白
つまもあるを引て笑をとく　松
人行て見る面を打ちり　揚水
さくりいむ今山の陰　絃
世の武士を笑行絵をせ　角
京る浦をる碇牛の多　弦
むかしやなの六つの面みく　笛
江湖くるとりより　化

卯花の皆精あるの郭　定
行うゐ在て首をる　多
南むく苔花の綱の裏清く　不卜
秋と美石をうゐ川至のつれく　鐘
候仰るあれ屋をを寄合せ　松
贄よ雲く秋の心を　笛
庵の言を知いる人も呼つる　絃
あくと男の新すむ月　卜

[illegible]の百敷七里を踏すん　下
伊勢の河内の名れ川つる　子
水車米はく音ハ[illegible]しあく　角
[illegible]の流くを用　千春
二月の蓬莱人もすくあるや　汝
姉待牛の[illegible]ときいの新　定
伯[illegible]の絵をかくて　翁
[illegible]る蓑の刈こし　松

蓑のそとをとうみあてたぐる　鐵
本魚をとゆる山陰も　下
岡と[メミウト]ゆて[illegible]る春月哉　汝
萩さし[illegible]すれ[illegible]　卜
同し時をとゆれ[illegible]名を[illegible]く　葉
[illegible]ん世を蝶の[illegible]　絃
[illegible]ゆ[illegible]　化
[illegible]の[illegible]　下

頃俗と云ふ事なれども
絵ようを習ふ為の
行源を筆初めとする
桐ちぐ苦き白ひ
材ゐるこの紅ふ清水
絶える夜の中も
俗俗と染る月の
桜（ケヤキ）ゆりうつる梢

鐘を白砂化ト下

信者の法華経代や吟ぜん
花士とよろこぶ
ゐる牡丹十里の色と
雲すれ岩よりも陽とうく
岩ゐふこと地獄と云ひ
ゐくや之外の法味も
題目よりあつ西
笑絵とうす青い法

水鐘峡角決化仝

笠引の唐山に泊るさむさかな　乞

千鳥なくある銚子の松名　角

ふるい川涼をあつる此川仏　杉

あれさひましろ松の白鷺　峡

寒蓮の七房に咲る其白く　卜

連花の川見えて久しき　白

餞別之會　翁

旅人と我名よはれん初しくれ　由之

又さんくわを宿々にして　其角

鶺鴒(カヽリキ)の尾を世にあるきて小　杜風

糧を分る山陰の橋　文鱗

ゆけむりに芝生に寄れ浜縁　仙化

新き霜庵月小まえりや

中の秋画工一つまかるし　魚兒

釣てしてかくる漫（カラ）舟　観月

新酒や淀小ひくを波のひま　全峰

數とをり是　嵐雪

酒のこふとをもへ蓮ひ花て　素

如月の雪を掘るつく子　翁

鑿（ヤマメ）つる独つくそうる瀬川　之

蕨一面小ゆる梅杭　角

適ふる如星小花をかるまり　風

月小や時人泊瀬の鐘人　鐘

蕾蕨とく白ひし故ちしく　化

ありそなるを泥偶偶　洛

遠中小そろ車蕨を老そ　翁

沖ふく舟ふ蕨ちれ祇（タツ）　之

花地小名の紛く波をかりき　雪

別そ丁とをを琴のよ　峯白

此の岩を打ち砕き世外に入り
蓮の如き光を焼き
光の如く徒に新しきるる
岩流れし沼の実を
明星を十深の松を吹く
命を切りて船に遊ぶ盤
乾坤を水に浮く人海の
立ち出ぬ波を形ひるる明

海原や石ふる坂の日の明れ
小細き刺しき山子供人
葛城の馬を酒債(サカニ)よりそれ
つるる星と時よりゆる
葉の立ち面白夕涼
憾ずく氏の天王
御牧堂に笛吹堂
信ずく佛ずく秋

見ることなき花の場 嶮しく 角

坂の絵 蜀をかけるる 吾

隠家や 寥(カラ)寂(ナ)の戸に立ちかへる 行

筏かせて 海苔をとる比 翁

岩陰をはうはこの木間はを 白

あまたれしる 春の山寺 之

早稲の間を見てよや時ふる 翁

紅葉する 岩の 堤 火 安信

藤山の ふれ小 枝を 抜みて 自然

いつて子猫の 春ふ 遊て 知足

鶯の 家を 訪 風の 用のうし 賞言

岩の ふる 此 地 風 知風

一里北雲母あり川上小童辰
狩りて門をたてる　言
命小七て出る句を作る小　之
牛小乗りみて宮つかる　信
叡山の吉野あり桜いさ　風
月を用ひる螺の酒　翁
高級小甲をかけて仕の風　笑
酒の紙をる治め橋古　風

唐造る西行公のあれそく　之
啄木高き杉の古枝　信
咲ぬ食の時を忘れ　辰
山も霞むとまてい清水し　之
幸螺る北池あり唐水　風
角の屑小化粧る裏　翁
清水北角を吟る性の四　言
摩る乗る松の間　風

羅ろくて砧ふるうらい慰さん　信

庭子ふゆつ子一家の清ゆ　芝

ふ日北ゆきうる鶴子て　風

あさくら東北ゆる川口　辰

楠二ふ頭ろう波夕涼　籟

笠坊テ布ゆ屋史の新　笑

神月ふ和星北強の新無ひ　芝

春いまゆく荊鞭引　籟

鶴雪の清ゆ子鶴の蕭ろ子　辰

ゆうかゆうらゆなゆ月て　笑

氏人の名菅多ゆ花さうり　言

駕　歳　ゆれの子まそまゆ　風

用と西を山ゆうよ山の名を雨て　信

辰の和ふ　陸を山ゆる　芝

京まてはまなうるやうや雲の雲　八雲

ふるさとをくけ海の月　蒙言

小蛤殺生とあるを紙ひちて　如竹

酒をもるをそうるの風　如風

引抜し裏屋の裏を折ひ　安信

僕をおくれてを年いそくし　自笑

時雨の雲の及庵の稽古つく　定辰

明日の今宵は仮寝市の月　信

つり舟の出るも明方ふ山見て　笑

後いくところ西の京を　雅

京洛別の後も一つひ　芝

あるとをくく鄙の徳物　言

楚市の紙の地に為もつく　雅

身小袖切くは妙い春苦し　風

約簿の和ふたそとをあむ　月のお
揚枝をまつのちうあひ　芝
小枕して夜風をいとる　辰
ひろく猫のあるを捨てり　信
うら年をれてそこを御る　芝
文の軍と紙鳶の　翁
松陰小ちく家ある波の夢　笑
翅を踏ふ鳥の別れひ　言

信
笑
翁
言
芝
辰
信
芝
翁
笑
言

ちかるを敷を敷て
之を用ふる鞠のち　笑
山ちう車小ちるを　翁
短ふして家をうかく　芝
御陣所小行婦法の鈴　辰
牝うくく蕾のくらむ　笑
殿やれて月を昔の新おう　言
花うをうえうとも年　翁

時雨かしら揺の鐘は聞こゆ　殿

陳のかりの宮ふかき霧を隔てる　信

山の上ゆ高のぼる月の光　風

雲を出でて雁の声聞ゆ時雨　忠

御殿うつる秋の夜　執筆

牡鹿鳴れふかき霧の中の秋の月　翁

貴賤なきよるうるほの床　知忠

二つ寝て笠を重ねる馬夕くれの　相国

かくふる独をかこつ寝覚　叩揺

伯制の月待ち出の秋の風　賞言

それと斗秋の風吉　自然

拾うて書は廉ふ年ふるさ　如風
念力岩をとおすとは　安信
乃世迄の拙ふ一句志や　定辰
出者れ響ふ者を投也　翁
かゝ拾を宝ふ下新のうゝや　芝
岩ふかゝるふ八百の響　葉
赤遠ふ焼節ふ二ツ口ッ遠ふ　猪
ふを宝ふ祝の月さうう　辰

それの秋ふふ井れ悔ふて　芝
猫ふゝて猫ふ者時てうう　風
ふ迄世ふ苔ふる女花ふて　葉
新ふゝふる所を言時ふふ　言
蘭ふ鶯毋は寿て放ちゆり　猪
象蓋を肖ふ負ふふふ　翁
天意ふ人新ふ意ふ雲ふ　信
文日の風れ文反の文　風

菓子賞しまおうとれてはをる　笑

もなの和面者名をらひ　々

見つゝや春葉はの箱　茅　如風

御士の新と新へ　梅　翁

武家春葉も紅地もかをひを　若今

孫娘の家と見るかくて　翁

琴引寄る宮ふるやを

刑捲る乃みく事れを云れ　翁

酒小屋行る友を集る

如手稚る父の一歯のうゝて　翁

焼跡や伊勢古代雷ふるれる人　知之

ゆきむらをそ新芝の秋　箕

松とはく力ふ名ゐをして　砂人

いりう烏帽子の絵る表風　之

眠るやう馬のいるる嗅さ　箕

墨とかくそ俺黄の月　人

蓮華や文ふ旅をなりれ之　砂人

雪をとりてるそ黄之うれ松　知之

海士のるう錆と告る貝吹う　箕

宵戸より雷ふ踏ふそ泉　人

ふよそ人此名月をそあへい　之

芙蓉黄のみ法ふと在芙蓉　箕

新宅

よろこぶや花よりかをる産屋紙　翁

蒜よみ出る地蔵前萱　紀之

投網を泡の編物寄合ひて　安信

風呂焼ふ月の明日の　翁

杉垣の明るふ鳥の夢　之

元門新しきて紙子打つて　信

稲妻の光てまれて筆投ず

聖年代別行雁をもく　翁

夕小雪を借り邨　人

合そとりの生涯を悟ふ　翁

次ニテ孤小舟書院ヶの浦
ハ毎ふかくるゆゑをとひて　翁

七夕年ごとの橋の末ゝ中
絶して寝ふくゝ月もこゝ河　翁

月ゝの雲色ゝ後清小船
八ツふゝるゝゝ恩清音ゝ　翁

1